

星座

逢いたくて でも 逢えなくて
もしも 願いが叶うなら
夜の空へと ほうり投げて与えて
彼方想い 星座になって

彼方の名前 体中に 何万回刻み付けても
傷跡から 血が溢れても 酷く痛みは愛おいしい

けなされていい 突き放されてもいい
いつまでも彼方愛してるから

逢いたくて ただ 逢いたくて
もしも 彼方が消えたなら
哀しい音色で 彷徨い奏で唄う
暗い淵に堕ちても

逢いたくて ただ 逢いたくて
もしも 願いが叶うなら
何故約束を 守れないのだろうか
永い路を 振り向かないで

足が沈んで 抜け出せない 闇の中で独りで眠る
彷徨い続ける夢はもう 二度と見ることはないから

易しさ捨てて 運命は信じない
どこまでも彼方愛してるから

逢いたくて でも 逢えなくて
もしも 彼方が忘れたら
姿変えても 彼方に逢いに往くわ
他の名前呼んでも

逢いたくて でも 逢えなくて
もしも 願いが叶うなら
助けを求め 震える私を抱いて
構わないよ 愛が無くても

見上げる夜空には様々な神話が語られ
銀河へ想いはせ 何処へ辿りつくの
何処へ往くのだろう

逢いたくて ただ 逢いたくて
もしも 願いが叶うなら
何も見えない何も聴こえなくていい
旨に宿る微かに

逢いたくて でも 逢えなくて
もしも 願いが叶うなら
夜の空へと ほうり投げて与えて
彼方想い 星座になって

彼方想い 星座になって

天音歌

散りゆく 花見つめ 夢現
いつしか 時代に流れ 心 彷徨う

数多の星のように 音と詞あれど
輝き 煌く 唄はいくつあるのだろう

浅き夢に 心奪われ
歩む道 彷徨えど
運命のまま 私は歌う
響け あまねくうたよ 響け あまねくうたよ

遠ざかる 雲眺め 愁い色
いつしか 時間は流れ 心 揺れてる

広がる空の中で 足跡探すけど
儚く 消えてく まるで幻のように

たとえこの身 朽ち果てようと
時を越え 歌い継ぐ
声に託し 私は願う
届け あまねくうたよ 届け あまねくうたよ

永久なる天空の中で 輝き続けたい
よろこび かなしみ 宿し 伝えゆくために

この身とかし 炎燃やして
星のように 照らしたい
運命のまま 私は歌う
響け あまねくうたよ 響け あまねくうたよ

キミガタメ

きみの瞳に映る わたしは何色ですか
赤深き望むなら 渡そう陽の光を

悲しみが溢れ 瞼閉じました
こぼれた滴は 心に沁みゆく

行き渡る波は 弱く交えます
とどけしゆりかご 眠りをさそう

夢になつかし 面影をさがす
手を伸ばし 強く 抱きしめたくなる

きみの瞳に映る わたしは何色ですか
藍深き望むなら 渡そう高き空を

歓びが溢れ 巡りあいました
こぼれおつ笑みは 別れを隠す

人はいつしか朽ち果てるけれど
唄となり語り継がれてゆくでしょう

きみの瞳に映る わたしは何色ですか
緑深き望むなら 渡そうこの大地を

もろく儚げなものよ 強く美しきものよ あるがまま

きみの瞳に映る わたしは何色ですか
安らぎ覚えたなら そこにわたしはいる

きみの瞳に映る わたしは何色ですか
うら深き望むなら 渡そうこの想いを
渡そう このすべてを

トモシビ

歩き出した道の途中
また立ち止まりかけた僕
モヤモヤした気持ちを連れて
足どり重く 家路につく

僕が描いた 未来たちはきっと
叶えられるのを待っている
希望だけでは 終わらせたくない
この弱さを超えてゆこう

決して消えない トモシビを
燃やし続けたい 不安定な心に
未来を明るく 照らせるのはきっと 自分でしかない
照らせるのはきっと 自分でしかない

今日も一歩踏み出せたと
そんな日々を 過ごしたい
誰にだって前向きには
なれない時も あるけれど

僕が描いた 未来へ続く道
二つの足跡 固めてく
苦しみの中 また一つの歌が
生まれ 僕は大きくなる

もしもトモシビが くすぶって
夢や自分さえ 見失うときには
誰かが信じていてくれる僕を 信じてみよう

決して消えない トモシビを
燃やし続けたい 不安定な心に
未来を明るく 照らせるのはきっと 自分でしかない
照らせるのはきっと 自分でしかない

夢想歌

子供の頃の夢は 色褪せない落書きで
思うまま書き滑らせて 描く未来へとつながる

澄み渡る空 果てしないほど青く
無邪気な心に 充たされ魅かれてく

やがて自由に飛びまわれる 翼を手に入れて
無垢な瞳は求めてく 空の向こうへ 行きたいな

止め処ない願いから 一つだけ叶うのなら
誰にも譲りたくはない 夢を掴みたいと思うよ
子供の頃の夢は 色褪せない落書きで
いつまでも描き続けられた 願う未来へとつながる

鐘が鳴る音 遠くから聞こえてくる
素直な心に 届いては響いてる

光りは 七色に変わって 弧を描いてゆく
無垢な瞳は求めてく 虹の向こうへ 行きたいな

止め処なく願うほど 忘れないでいたいこと
支えてくれる人がいて 夢を見ることができるから
子供の頃の夢は 色褪せない落書きで
思うまま書き滑らせて 描く未来へとつながる

やがて自由に飛びまわれる 翼を手に入れて
無垢な瞳は求めてく 空の向こうへ 行きたいな

止め処ない願いから 一つだけ叶うのなら
誰にも譲りたくはない 夢を掴みたいと思うよ

止め処なく願うほど 忘れないでいたいこと
支えてくれる人がいて 夢を見ることができるから
子供の頃の夢は 色褪せない落書きで
思うまま書き滑らせて 描く未来へとつながる